Letter to the Editor

IUPAC Workshop-Advances in Analytical Chemistry 2018 (Nara)／ 第70回イオン反応研究会 合同講演会開催報告

Report of IUPAC Workshop-Advances in Analytical Chemistry 2018 (Nara)／ the 70th Workshop on Fundamentals, Ionization and Ion Chemistry in Mass Spectrometry

山垣 亮^{1,3}・竹内孝江^{2,4,*}

Tohru YAMAGAKI and Takae TAKEUCHI

¹ 日本質量分析学会イオン反応研究部会会長 *Chair of the Division of Fundamentals, Ionization and Ion Chemistry in Mass Spectrometry, The Mass Spectrometry Society of Japan*

² 日本質量分析学会イオン反応研究部会幹事 *Secretary General of the Division of Fundamentals, Ionization and Ion Chemistry in Mass Spectrometry, The Mass Spectrometry Society of Japan*

³ 公益財団法人サントリー生命科学財団 生物有機科学研究所 *Bioorganic Research Institute, Suntory Foundation for Life Sciences, KYOTO, JAPAN*

⁴ 国立大学法人奈良女子大学 理学部 化学生物環境学科 *Department of Chemistry, Biology, and Environmental Science, Faculty of Science, Nara Women's University, Nara 630-8506, JAPAN*

編集長、ならびに会員諸氏

2018年4月27日(金)、奈良女子大学大学院F棟大会議室において、第70回イオン反応研究会・IUPAC Workshop-Advances in Analytical Chemistry合同講演会を開催しましたので報告いたします。この合同講演会の前2日間にはIUPAC ディビジョンV(分析化学ディビジョン)ミーティングが開催されていました。

IUPAC(International Union of Pure and Applied Chemistry:国際純正応用化学連合)は化学分野全体を発展させるために1919年に発足し、今年100周年を迎えます。IUPACでは、長倉三郎先生(東京大学・岡崎国立共同研究機構分子科学研究所名誉教授)が日本人として初めて会長を務め、その後、巽和行先生(名古屋大学名誉教授)が2004～2005年の会長を務められるなど、日本の科学者のIUPACの運営への貢献は大きいのだが、IUPACにおいてどのような活動が行われているか日本ではあまり知られていないのではないのでしょうか。IUPACのGA(General Assembly:総会)には、専門分野からなる8つのディビジョンがあり、ディビジョンVは分析化学に関する用語と基準の策定等を担当しています。筆者(竹内)は、日本のNAO(National Adhering Organization)である日本学術会議から推薦され、2016～2017年ディビジョンVのTM(Titular Member)、2018～2019年のTMおよびSecretaryに選ばれ、分析化学分野のプロジェクトに参画しています。IUPACディビジョンVミーティングには、TM7名、AM(Associate Member)3名、NR(National Representative)4名が出席し、継続プロジェクトの進捗報告の確認や新規提案プロジェクトに対する議論等が行われました。IUPACプロジェクトは<https://iupac.org/projects/>でweb公開されていますのでご覧ください。ここでも日本質量分析学会の役割は大きく、用語委員会は、分析化学分野の用語の定義書籍「オレンジブック」の編纂プロジェクトに協力をしています。

本報告の第70回イオン反応研究会・IUPAC合同講演会“IUPAC Workshop—Advances in Analytical Chemistry”には、招

(Received December 3, 2018; Accepted December 3, 2018)

* Correspondence to: Takae Takeuchi, *Department of Chemistry, Biology, and Environmental Science, Faculty of Science, Nara Women's University, Kitaoyanishi-machi, Nara 630-8506, JAPAN*, e-mail: takeuchi_t@cc.nara-wu.ac.jp

竹内孝江, 国立大学法人奈良女子大学理学部化学生物環境学科, 〒630-8506 奈良市北魚屋西町

第70回イオン反応研究会・IUPAC国際ワークショップ合同講演会
(左：ポスターセッション、右：オーラルセッション)

第70回イオン反応研究会・IUPAC国際ワークショップ合同講演会 参加者
(奈良女子大学記念館前)

待講演13件のほか、大学院生によるポスター発表9件がありました。ワークショップは公開され、参加者数は大学や高等専門学校の学生を含め85名でした^{1)~3)}。講演プログラムの詳細については、イオン反応研究部会のホームページに記載されているのでご覧ください。IUPACを構成する国として、多くの発展途上国が参加しているのが印象的でした。このような機関が国際的基準を策定することの重要性を改めて認識しました。

IUPACディビジョンV委員長のDr. Zoltan Mesterは、“Redefinition of the mole and the new SI”について講演しました。2013年にイスタンブールで開催したIUPAC第47回GAの折、国際単位系の定義の改訂において質量の定義が改訂されることが議論され、それに伴って影響を受ける「物質質量とその単位であるモルの定義」を明確にすべきであることが提案されたことや、その後ディビジョンI, IIおよびVが協力して再定義案を提出した過程が紹介されました。

イスラエルのProf. Ilya Kuselmanは“Risks of a false decision on conformity of a multicomponent material or object and quality of chemical analytical results”という演題で講演を行いました。工業製品や食品など複数の素材、成分が含まれる「もの」についての品質管理について、「問題あり」と判定する際のリスクを、化合物の「化学分析」と「統計学的手法」を駆使して評価するという研究が紹介されました。

ポスターセッションでは9演題が掲げられ、活発なディスカッションがなされました。大学院学生らが自分たちの研究成果を英語で発表し、IUPAC委員とも活発に議論を行っており、若い研究者たちにとってよい刺激になったようにみえました。

最後に

今回の合同講演会の講演者は広く世界中の国々から集まり、研究分野は材料科学、クロマトグラフィー、質量分析学、電気化学など多岐にわたっており、まさしく多様性から新しいものが生まれると予感できる講演会でした。すべての講演者、ポスタープレゼンテーションをした学生、およびすべての参加者、本合同講演会にご協力くださいました日本質量分析学会関係の方々に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 竹内孝江, 日本学術振興会マイクロビームアナリシス第141委員会第173回研究会講演資料集, 2018年9月.
- 2) 竹内孝江, 化学と工業, **72**(1), 45 (2019).
- 3) <http://www.nara-wu.ac.jp/mass/IUPAC/>